

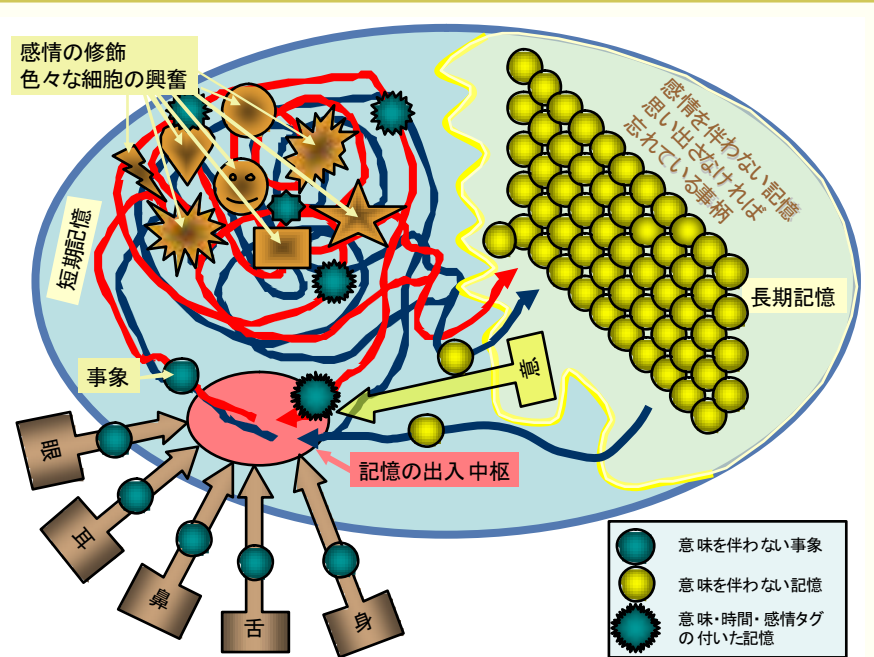


死ぬ瞬間の著者であるキム・プロクターがいつうに死を宣告された人がいつかのプロセスを否認→怒り→取り引き→抑うつ→受容を通り死とつてもを受容するというのが生まれた時からいつも私たちは死を意識していなければならない。確かに「いつか」の一面もあるとは思いますが、私自身らの死にいつかのプロセスを経たとは思えないし、日常生活の中ではほとんど考えずに生活している。むしろ、不安な「過去への後悔、未来への不安」を意識かき切り離すことで、毎日を送っているのではないかと思える。深層心理に迫りやるか？その理念的な「いつかは」は、ただ、忘れていくように「いつか」である。それが、普通の私たちの受容の形のように思える。

受容とは忘れ去るプロセスなのかもしれない。今日の講演で私の父に話をすると「頼んだのは、東洋的な思想の中で悟りに至るプロセスを示して」と思われる。畢竟、入法界品も、事実を正確に理解しながら、それを意識の外に切り離すプロセスの話も、すべて「いつかは」なにかかと思いつく。その「いつかは」不安を切り離し、普通に生活していくことが、言えるのか？

そのプロセス、物事を受容するプロセスから見た脳の記憶のメカニズムを少し詳しく考えてみたい。

この図は非常に単純化したものでありお許しください。脳の記憶には、何段階かそのプロセスが想定されています。忘れるという時も、思い出さずにするという時も、病気や脳の怪我で記憶を物質タンパク質や神経細胞が壊れて保存している部位を失ってしまった場合、中には脳にない場所から想像やシミュレーションで記憶を再現して、思い出さずにするというプロセスも、思っている以上に多いと、その対象に伴って生じた感情も同じように思い出さずにするもあるが、時間かたしつ、感情を伴わない事象として思い出さずにするというプロセスは、経験するプロセスである。その外部から入力された事象



に伴う感情は、脳内のある種の部位の細胞の活性を伴うものであるが、通常記憶が脳内を巡回していている間、その細胞の活性が時間とともに弱まってくる。その過程で、感情を伴わない事象だけを記憶領域に押し込み、感情を伴わない事象を記憶領域に押し出した時、時々は再度感情が修飾し、すなわちある部位の細胞の活性を伴って思い出さずにする。多くの場合、時間かたしつ、感情を伴わない事象として想起できる状態では、感情的修飾なしに想起できる状態が、忘れているというストレスを

伴う経験として頭に入ってきた事象が、ただの事象として記憶された時、感情を引き起こす細胞の興奮を伴わないため、ある種の受容とつい状態になる。考えてもよい。私たちの日常生活では、記憶していることすべてをいつも覚えていくわけではない。

このように見ると、死期が間近に迫った人に対して死にいつかの意識をせよ、受容しなさいというのはあまりにも的外れなように思える。死に至る生物学的な変化について理解しても、いつか、告知である。死を告げるように告知ではないのだから、告知かと思つて、どんなに死期が近くても死を忘れることができる。それが、私たちがいつかの生き方のなりたい。

多く鬱病の人に頑張りすぎないといういわれられているが、それは、頑張りすぎること、原因となつた忘れたことを思い出させてくれること、皮膚肉な結果になつてからで、忘れた状態を維持することが本来サポートが必要なためである。忘れていた時、心も心が平穏でいられる時間として、思い出さずにしない。ただ、いつか、鬱病の人は何か原因があつて抑鬱になるのではないかと誤解しないでいただきたい。

私たちが、在野での着取りに取り組んで、その中で、今までの話に矛盾するところがあるが、告知することは大変重要である。私たちが、死を伝えるのを告知する者ではない。患者さんが受容しようとしなかつた、生物学的には必ず受容させられるものであり、それは、私たちが同じことだから、敢えて必要なことを必要がない。何を伝えていくか、いつかの病気になる、いつかの経道をたどる、いつかの知識である。それだ、大切なこと、前の人を敢えて伝えることは、重要なことではない。極論を言え、生まれた時から私たちが、この世にいた。

以前看取った患者さんに出会った時、あと3ヶ月と言われて退院してきたから、3ヶ月分のカレンダーを毎日眺めて毎日「ロロロ」って消していった人がいた。私はその方に「明日別の病気で死ぬかもしれない、消去法ではなへ、1日ずつ1日を付けて行きましょう、それが今までのちぎれた生き方だから」と話したことがある。今後の病状、体の変化を説明すると同時に、人は時間が意識できないところ、将来に不安があるのではなく、将来に何かあるのではないかとこのことを今不安に思っている、それは今までの人生と何ら変わりがないことだから、今こうして息を吐いていられるのではないかと、うつろいな話をした。ううを思っている。

死は自らの意志を超越したところ、生物学的宿命としてちぎれる。だからどんな障害を持って、癌、余命わずかと言われても、受容するところ、神経をすり減らすより、今までの人生を精一杯すること、精魂傾けることが大切だし、それはまさに人の人生そのものなのではないかと思ってしまう。そしてそれは、死を意識せずに生きているのと同じ他ならない。

人は自分の意志で生きているという幻想を抱いているものである。しかし、実際には、自分の意志で生まれたわけではない。自分の意志で死ぬわけでもない。生きる理由もなければ死ぬ理由もないのである。ただ、ここに存在しているという現実のなかで日々生活している。死の受容は、人生の受容そのものなのではないかと思う。私は分子生物学として純粹に生物細胞の研究をしている。動物も使うところが多い。何事もなかつたところ、死なへ、細胞や動物の姿に何か人智を超越したのを感じるのは不思議なことである。忘却の好む法は、人間の通り、忘れるとは、意識がなくなるとは、様々な感覚が脳を通り過り、その瞬間の時の、生きている瞬間なのかもわからない。禅の世界も近いものがあるかもしれない。悟りは、事実を正確に知りながらも意識しなへ、死の受容

とは生きることに他ならず、私たちが医療者は、患者さんに対して、日々その時々的人生が維持できるように支援する、そのことは、死に間近に控えた人に対して唯一の思っている。

実は私自身高校入学時に、意気消沈することがあり、一人で熊野半島の方へ旅に出たことがあった。その時だっと思つた、観光バスに乗ってぼやく外を眺めている時に、バスのガイドさんが、忘却とは忘れ去ることなり、云々と解説をしているのを何となく覚えている。今思つて、自らの意志で処理しきれない嫌なことを言葉のうちに忘れることにより現在に至る、その思いも思える。若い人でも学生でも、物忘れは日常の事である。年を重ねれば、勉強や試験はどんなに簡単なものかと思つ。年を重ね、思いも忘れるが、思いも忘れることで生きていくのも、ただの思い。